

## 支那譯經史研究後之感

吉 田 鍊 正

私は天台教史綱要學習中、餘暇を利用して支那に於ける三藏傳譯に付いて興味を感じ研究といふ程の大々の事も出来ぬ迄も、少し調べて見た。末だ師房に居た當時日蓮宗講義錄各宗歴史（小林是恭師述）編中に支那佛教史の大略が述べられてあつたのを讀んで心を幾分か引かれて居た處へ教史綱要により一層自分の心を動した。

最初手を染める時は譯經史とて、左程大なる問題でもないかの如く感じて居たが、いよ／＼研究に掛つて見ると翻譯家を調べるのみにしても可成の事であり、その譯した經典を調べるに付ても一通りの苦心でない事が判つた。況や是位の研究は佛教史中の教會史の一部にしか過ぎぬ事を知ると如何に佛教史が廣大なるものかを知る事が出来た。自分の研究は此の教會史の一小部分を掻き廻す位のものであらふ。是の如き大事業を學習の餘暇を利用しての研究なれば將來は幾十倍の奮闘を必要とする。充分なる時間と自分の淺學無識と相俟つて現在迄に出来たものは甚だ幼稚なものであつた。大正大藏經目錄及佛教年表支佛講話等外三四を參考書として三藏傳譯を隋唐已前と隋唐時代に大別し更に隋唐以前に（後漢三國兩晉南北朝時代に涉る凡そ五百年間）に出現せる譯經者迦葉摩騰以後六十餘家を

已前とし隋唐時代に現はれた譯經者玄奘已後四十餘家を此の時代とし如上の諸家を時代順に同時代にあつては五十音順に準據して配列し各項下に所譯の經典の名稱と經典閣藏の便宜上大正大藏經に於けるその經の所載番號を調べた。譯家の出生年の不明のもの多いと梵名に對する譯名の不明なものは今日迄に於て終始一貫せる難關であつた。然し今後は是以上の難關に遭遇することは覺悟せねばならない。從來の研究に於て感動した事は諸譯家の傳記を讀むと各譯家が事業に忠實なる事は自己の生命を賭しても事業に携はつた多くの譯家を偲ぶ時は一卷一品なりとも感謝の意なくして讀誦出來ないと思つた。又隋唐已前(舊譯)が意味譯で、隋唐時代(新譯)が直譯であつた事は私等が經を繙くに際し大に興味ある事であらふ。種々研究して見ると多大な新智識を得ることが出来るが又多大なる努力と、完成する迄には餘程の年月を費すことを豫期せねばならぬと思つた。

僅な思ひ付きから着手した譯經研究も焦慮した爲不完全なものとして未だ發表の運びに至らないことを遺憾に堪へない。今後は從來の失敗に鑑み周到なる注意と多大なる努力の上に諸先生の御指導を仰ぎ現在より少しなりとも完全に近いものを作成し度いと思ふ。